

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

水が何より旨い、と言つて、父はときどき水をもとめるほか殆んど何も食おうとしなかった。手や足に浮腫が出て来たので、もう何日も持たないだろうと母が私に言った。そう言う時のA母の表情が少しも乱れていないのを私は見た。父の病気が絶望的だと解つてからの二年は母の顔から表情らしいものを取りさってしまった。父の世話をしている母の顔を見ると、病状の変化ということは父の生きていることと何の関係もない自然①ゲンシヨウで、父は病に憑かれたままいつまでも生きていると信じているようにも見えるほど動揺の跡がなかった。近所の人がなにか楽しい話を母のために持つて来る。そんな時、母は笑うのだが、それはB母の二重の外側にある顔で笑がおさまると次の②シユンカンからすぐまた母は茫然とした無表情の状態に陥っているのだ。危篤という電報で私が帰つて来てから、父はまた持ち直して、前と同じような状態がもう十日も続いていた。父は言うことも目や耳も割合はつきりとしていた。だが何も特別考えているようには見えなかった。病床の二年が父の思考力を摺りへらしてしまつたのか、と私は思った。家のことについて心配らしい言葉は全然父の唇を漏れることがなかった。そこにはしかし何の③ヨクセイもないようであつた。発作の激しい時にはなにかと無理を言つて怒ることがあつても、その他は絶対的に母に信頼して、薬や手当についても意見を述べることもなかった。

私が家についた日、C母は父の気持ち推測して、学校の移転で今年夏休みが早くなつたのだと言えと言つたが、父は私を見て、驚きのようなものも、喜びのようなものも示さなかつた。休みが早くなつたことを言うと、父は何も答えず、学校の様子を色々聞いた。どんな教師について何を研究しているのか、東京にいる知人はどんな生活をしているかなど、私はD見え透いた言訳はしないほうが宜かつたと思ひながら、外のことは何も言わずに自分の室へ引込んだ。

夜中に発作が起きた様子があつて眼を覚ますともう母は起きていて色々と手当をしているようであつた。水をとり台処の方へ行つたりする足音で、父の様子を聞き量りながら私は起きなかつた。二日間の汽車旅行の疲れがE頭とは別に私の身体を眠りの方へ縛りつけていた。起きなくても宜いと思ひながら私は少年時代に使い古した自分のティブルの脚を見ていた。そのうちに父の発作は静まつたようであつた。父の死そのものを考えることは私を少しも動かさなかつた。ただ父が自分の死に直面して、どんなことを思つているのか、ということが執拗に私の中に湧いて来ていた。

伊藤 整 作 「生物祭」

問一 傍線……①③のカタカナを漢字で書きなさい。(漢字は楷書体・以下同じ)

問二 この作品の作者「伊藤整」と同時代に執筆活動をしてきた小説家をア～オの中から選び、その小説家の作品をa～eの中から選び、記号で答えなさい。

ア 森鷗外 イ 梶井基次郎 ウ 芥川龍之介 エ 坪内逍遙 オ 北村透谷

a たけくらべ b 高瀬舟 c 地獄変 d 檸檬 e 当世書生気質

問三 傍線部Aの部分と同様なことを言っている部分を文中から十字以内で書き抜きなさい。

問四 傍線部Bの「母の二重の」の部分で、母の何の二重なのか、漢字一文字で答えなさい。

問五 傍線部Cの部分で、母が推測した父の気持ちとはどのようなことか、二十字以内「～こと」に続くように書きなさい。

問六 傍線部Dの「言訳」の内容を文中から二十字以内で書き抜きなさい。

問七 傍線部Eの「頭」とは、「私」のどのような思いを意味しているか、説明しなさい。

二、次の①、②同音異義語のカタカナをア～オの文の内容に合う適切な漢字で書きなさい。

① ソガイ

ア、計画を(ソガイ)する。

イ、(ソガイ) 感に苦しむ。

② シンチョウ

ウ、(シンチョウ)な態度で臨む。

エ、意味(シンチョウ)なことば。

オ、才能を(シンチョウ)する。

三、 次の①～⑤の四字熟語の読み方をカタカナで書きなさい。

① 荒唐無稽

② 魑魅魍魎

③ 臥薪嘗胆

④ 画竜点睛

⑤ 和氣藹々

四、 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

辞書は保険だ。辞書を持つっていると、言葉の保険に入っているような安心感がある。やることはやってあるんだというよ  
うな。辞書がないとそういう安心感がないというか、A一寸先は闇、わからない言葉に出合ったらどうしよう、という不安  
感がある。

長い文章を書くのに、ときどきホテルにカンズメになるときがある。そのとき辞書を忘れると、(しまった!)と思う。  
飛行機に乗ったあと保険をかけるのを忘れた気分がこれかな。と想像したりする。

じっさいにはそう使わない。辞書がなくなったら文章は書ける。カンズメの間中、辞書を持っていただけ一度も引かなかつ  
た、ということもある。掛け捨て保険に入ったけど、事故もなく無事に海外旅行を終えた気持ちである。最後の飛行機か  
ら降りてくるとき、もう保険のことなんか忘れていた。旅のあれこれの思い出いっぱいである。

カンズメが終わって出てくるときも、辞書のことなんか忘れていた。文章そのものの考えでいっぱいである。辞書を一度  
も使わなかったカンズメというのは、それだけ書くことに乗っていたということにもなる。

辞書の世話にばかりなる文章は、たぶんB級かC級の出来だろう。B 保険の世話にばかりなる人生も、たぶんB級かC級  
の人生である。と書いてそれが不安が發生するのが辞書の変なところだ。

ホテルの机の抽出には必ずC 聖書が入っている。あれはキリスト教の信者であってもそう開くものではないだろう。でも  
やっぱりないと落ち着かない。さまにならないというのであるわけで、あれも一種の保険だ。日本は仏教国だから、あの聖  
書はますます開かれぬ。手にする人がいない。そこで提案だが、どうせならあの聖書を辞書にしたらどうだろうか。ホテ  
ルの机の抽出を開けると、必ず広辞苑が一冊入っている。寝る前にどのページでもいいから開いて読む。するとだんだん眠  
くなる。ではなかった、カンズメのときいちいち辞書を持っていかなくてもすむではないか。出版社の営業部員の①ケント  
ウを折る。ホテルの一室に一冊ずつ必要となると、売上げは相当伸びる。②カイテイ版を出すときも、ホテル関係の部数は  
③ホシヨウされるので、Dかなり楽だ。

そんなわけで、辞書は保険であり、聖書でもある。そこに書いてあるのは一つの真理である。人々は悩みがあると、いや  
わからないことがあると、辞書を引く。そして辞書に書かれていることを頼りに、それを指針として、自分の考えを改め、  
生き方を決める。いや書き方を決める。

聖書の厚さと辞書の厚さはよく似ているではないか。活字の数も似ている。活字の大きさや使っている紙も似ている。旧  
約と新約、第一版と第二版のあるところも似ている。つまりこれは同じなのだ。いずれもこれは世界の聖なる書なのである。  
おろそかにはできない。

最近では電卓の辞書があらわれてきた。私はやらないがワープロにも辞書機能がついている。電卓の辞書なんてたしかに便  
利そうだ。手帳ぐらいの大きさのものならいつでも持つて歩ける。喫茶店で④ゲンコウを書いていたとしても、わからない  
言葉があればさっと引ける。ぼんぼんとボタンを押せばぼんと出てくる。しかし電卓の聖書というのはあるだろうか。そ  
れは可能だろうか。

喫茶店でコーヒーを飲んでいたとして、何か悩みがあって電卓の聖書を取り出す。いや悩みだけで聖書を読むわけではな  
いだろうから、迷いにしよう。人生に⑤ビミョウな迷いが生じて、ポケットから電卓の聖書を取り出す。そしてボタンを押  
すと答えがぼんと出てくるというわけにはいくだろうか。私は聖書を常用しないのでわからないが、あれはふとしたときに  
任意のページを開くのではないかと想像する。すると電卓聖書にも任意のNボタンがあり、それを押すとアトランダムな項  
目がぼつと出てくる。その一節を読んで人生の指針にする、ということがあるだろうか。

Eどうもその辺から宗教が蒸発していくような気がする。宗教の場合は答えがわかればいいというものではない。答えを  
自分でわかるための修行というか修養が目的としてあるわけだから、ぼんと答えが液晶表示で出るといわけにはいかな  
いだろう。

赤瀬川原平著 「言葉の保険について」

問一 傍線①⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部Aは慣用句であるが、同じ「一寸」を用いた次の意味を表す慣用句の後半の部分を四文字で答えなさい。

慣用句―「一寸の虫にも(〇〇〇〇)―」意味―「どんなに小さく弱いものにも、それ相応の意地があること」

問三 傍線部Bの部分は、どのような人生か、文中の一語を文頭において十文字程度で説明しなさい。

問四 傍線部Cの「聖書」について、作者はホテルにおいてどのような役割を果たしているか、ユーモアを込めて述べてい  
るか、それがわかる部分を抜き出し、はじめの五文字と終わり(句読点を含む)の五文字で答えなさい。

問五 傍線部Dの部分の主語を書きなさい。

問六 傍線部Eの部分は、比喩的な表現であるが、作者が言いたいことを、十文字程度で答えなさい。

受験番号

一、

問一 ①  
②  
③

問二 家小説  
作品

問三

問四

問五  
こと

問六

問七

二、

ア①  
イ①  
ウ②  
エ②  
オ②

三、

①  
②  
③  
④  
⑤

四、

問一 ①  
②  
③  
④  
⑤

問二

問三

問四 初め  
終わり

問五

問六